上北島篠島遺跡

福岡県筑後市大字上北島所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第39集

2002

筑後市教育委員会

序

本書は、平成13年度に行った上北島篠島遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。

筑後市内は文化財の宝庫であります。今回報告する上北島地区周辺では、以前から先人達の残した埋蔵文化財の存在が認められており、昭和44年に上北島狐塚遺跡が調査され、弥生時代の土器形式が設定されるなど、筑後市を代表する遺跡地となっております。

当遺跡からは中世を中心とした遺構と遺物を確認しており、市内に於ける中世集落の姿が垣間みえてきました。

本報告にあたり、地権者並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜ったことを深く感謝申し上げます。

平成14年3月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口和良

例言

1. 本書は平成13年度に筑後市教育委員会が行った上北島篠島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。

3. 本書に使用した図面の遺構実測図は上村英士が作成し、遺物の実測、浄書は横井理絵、仲文恵、上村が行った。

4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村が行った。

5. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としており、方位は全て座標北（G.N）である。

6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
   SD－溝　　SK－土壙　　SX－ピット、不明遺構　　SE－井戸

7. 本書の執筆・編集は上村が行った。

目次

Ⅰ.調査経過と組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ.位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ.調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅳ.まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

Ⅰ.調査経過と組織

上北島篠島遺跡は筑後市大字上北島字篠島に所在する。発掘調査に至る経過は、平成13年3月に開発原因者である有限会社藤木工務店から開発予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会に照会があり、これにより開発関係者との協議を行った。協議の結果、開発予定地が遺跡包蔵地であることから試掘調査を行い、遺跡が確認されたため開発予定地内の道路部分と浄化槽設置部分を本調査、他を保存することで合意した。また、発掘調査から報告書までの費用を原因者である有限会社藤木工務店に負担いただいた。調査は平成13年5月に行い、整理及び報告書作成については、平成13年度内に筑後市文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。

調査組織

1）平成12年度（事前審査）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	庄村國義
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳　小林勇作（事前審査担当） 柴田剛　立石真二 上村英士

1）平成13年度（調査・報告書）

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳　小林勇作　柴田剛　立石真二 上村英士（調査担当）

5）発掘調査参加者

地元有志

6）整理作業参加者

整理補助員　平塚あけみ　仲文恵

整理作業員　野間口靖子　湯川琴美　野口晴香　横井理絵　妹川玲子　荒巻悦子　福田澄子　佐々木寿代

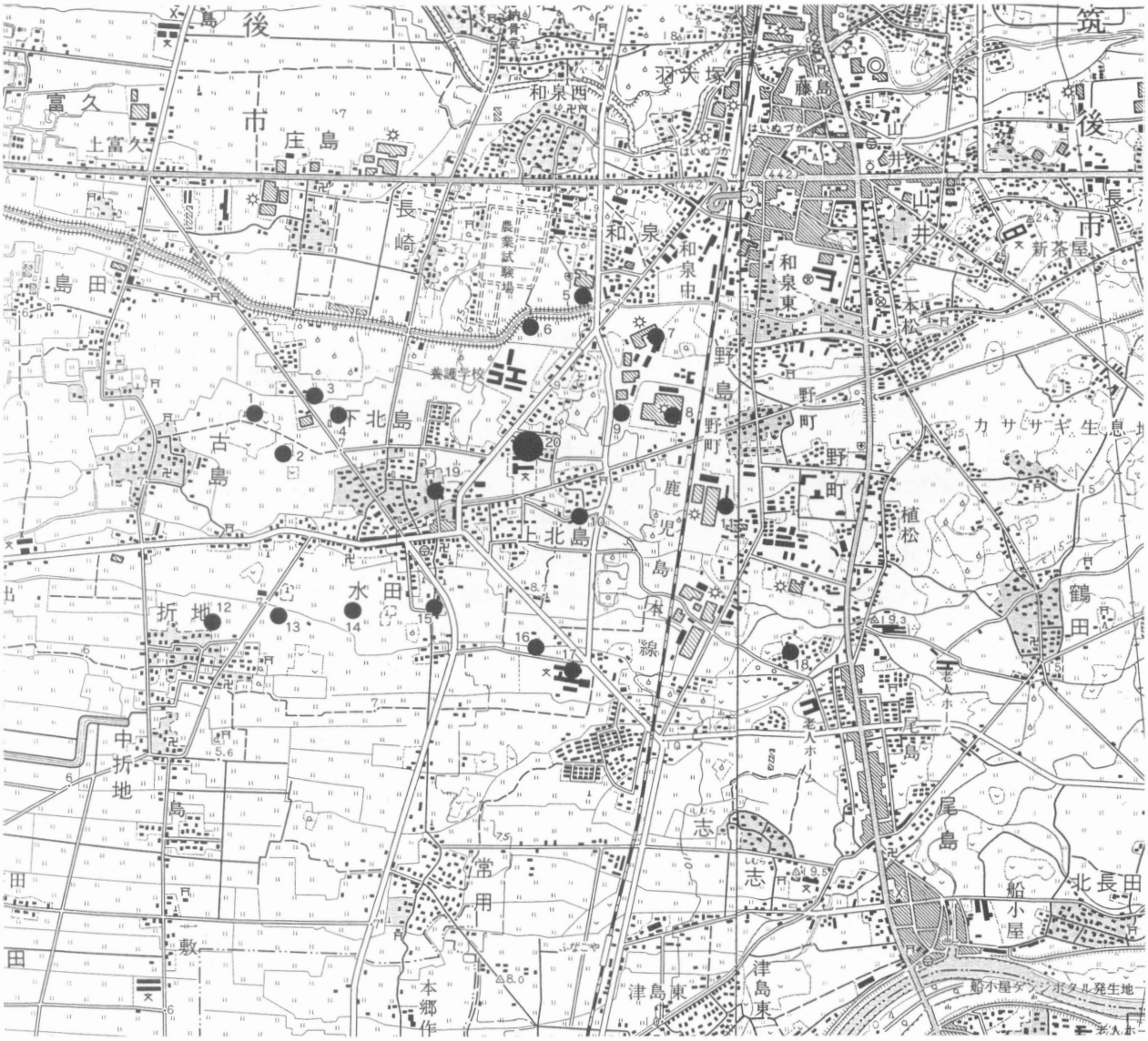
尚、調査及び整理に際しては次の方にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。

（敬称略）

福岡県南教育事務所　小川泰樹

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、潅漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。



1.古島榎崎遺跡　2.榎崎遺跡　3.下北島久清遺跡　4.下北島久デ遺跡　5.和泉近道遺跡

6.下北島櫛引遺跡　7.井原口遺跡　8.狐塚遺跡　9.上北島花畑遺跡　10.上北島前田遺跡

11.上北島平塚遺跡　12.折地長間寺遺跡　13.水田伊勢ノ脇遺跡　14.水田正吹遺跡　15.水田下桜町遺跡

16.水田杉ノ元遺跡　17.水田山伏遺跡　18.裏山遺跡　19.水田天満宮　20.上北島篠島遺跡

Fig.1　周辺主要遺跡分布図（1/25000）

Ⅲ.調査成果

(1) はじめに

調査地は水田天満宮から北東へ約400mの地点で水田小学校北側隣地である。標高約8m程の低地に立地しており、現況は水田であった。調査対象面積は約200m²、調査期間は平成13 年5月7日から5月29日迄である。発掘調査は上村英士が担当した。遺構の掘削は表土から遺構面までを（有）フクシマ重機に委託し、遺構面からは地元発掘作業員による手作業の掘削を行った。また、調査終了後の埋め戻しは開発原因者で行っている。発掘調査中には水田小学校の児童や地元住民の遺跡見学があり、遺跡発掘について賛否や、地元歴史についての有意義な意見を聞きくことができた。

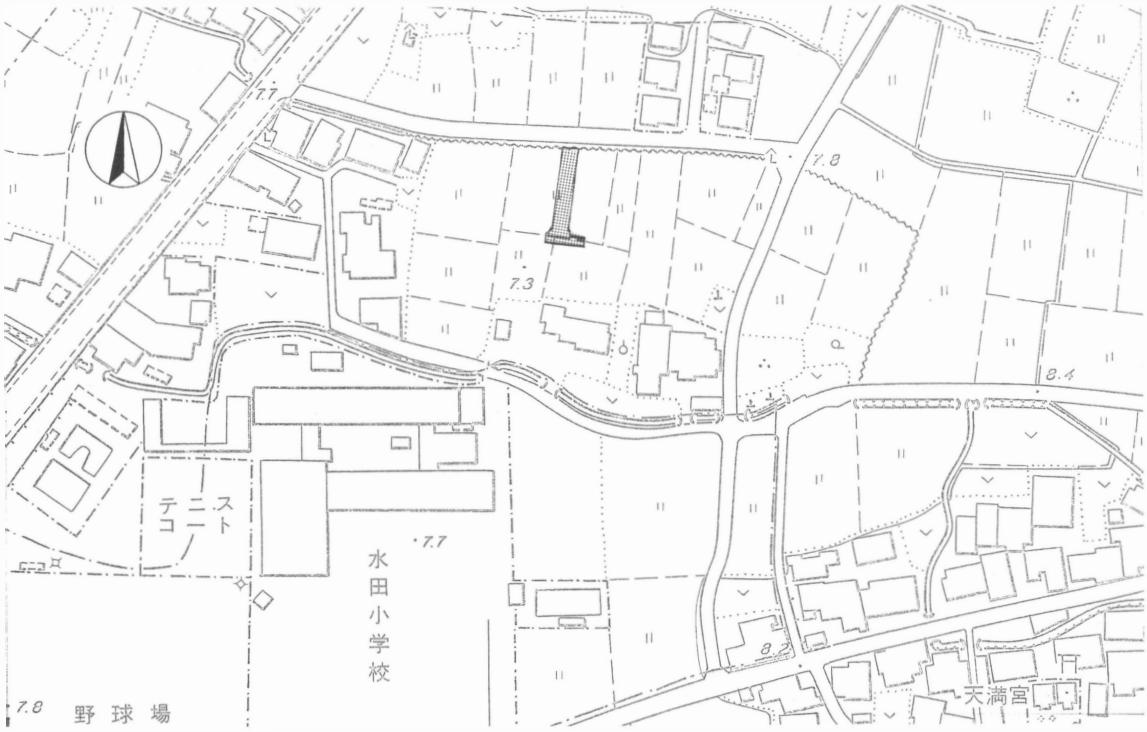


Fig.2　上北島篠島遺跡調査地点位置図（1/2500）

旧→新

S－番号	遺構番号	備考	
1	SD001	溝	1→2
2		土壙	
3		ピット	
4	SX004	ピット	
5	SK005	土壙	10→5
6	SX006	ピット	
7		ピット	
8		ピット	
9		ピット	
10	SD010	溝	
11	SX011	ピット	
12		ピット	
13		ピット	
14		ピット	
15	SK015	土壙	
16		ピット	
17		土壙？	30→17
18		ピット	30→18
19		ピット	30→19
20	SE020	井戸	27→20
21		ピット	30→21
22		溝	30→22
23		溝	30→23
24		ピット	
25	SX025	土壙or溝	
26		ピット	
27		溝	
28		ピット	
29		ピット	
30	SD030	溝 30→17.18.19.21.22.23	

Tab.1　上北島篠島遺跡遺構番号台帳

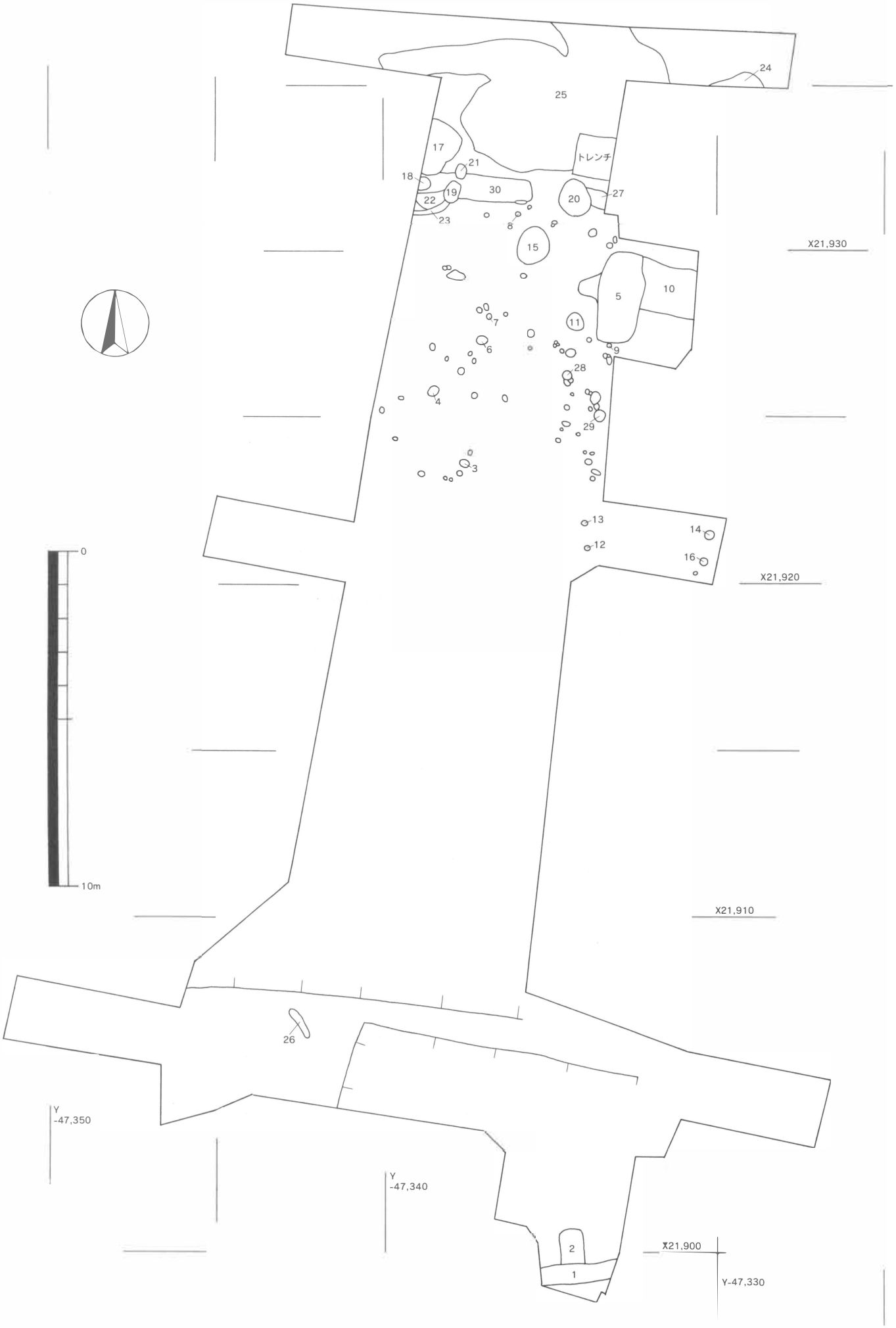


Fig.3　上北島篠島遺跡　遺構略測図（1/150）

Fig.4　上北島篠島遺跡　遺構全体図（1/150）

調査区の土層は、耕作土下に暗黒茶色土の遺物包含層を検出し、その下の明黄褐色土と砂礫層で遺構を検出した。明黄褐色土は調査区北側に、砂礫層は調査区南側に広がる。

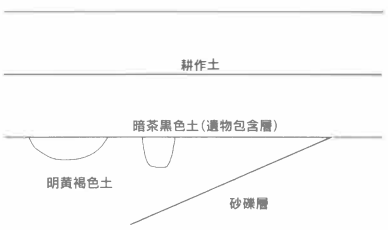


Fig.5　上北島篠島遺跡堆積土層模式

(2) 検出遺構

井戸

SE020（Fig.6、PL.2）

調査区北側で検出した径約1.05m、最大深さ約1.16mを測る素堀りの井戸である。埋土は全体的に小礫を含む粘土質で、遺物は土師器甕片、青磁碗片、陶器片、瓦質土器鉢片、擂り鉢片、火鉢片、石臼片が出土。

土壙

SK002（Fig.8、PL.2）

調査区南端で検出し、SD001に切られた隅丸方形の土壙である。検出長軸約1.1m、短軸約0.8m、最大深さ約0.32mを測る。埋土は小礫を含む粘土質である。遺物は土師器小皿片、瓦質土器片が出土。

SK005（Fig.7、PL.2）

調査区北東隅で検出した、SD010を切る土壙である。検出長軸約2.7m、短軸約1.1m、最大深さ約0.26mを測る。埋土は淡灰黒色土である。遺物は土師器小皿片、土鍋片、青磁碗片、

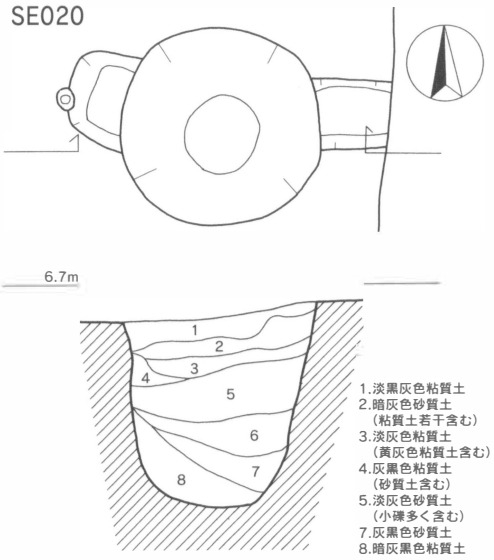


Fig.6　SE020（1/40）

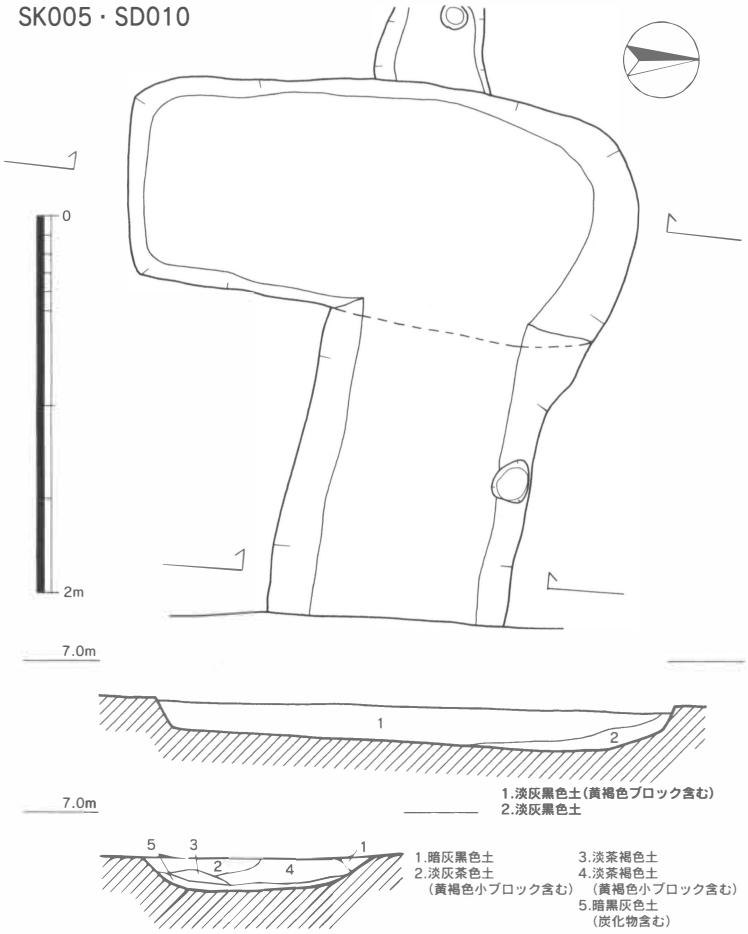


Fig.7　SK005、SD010（1/40）

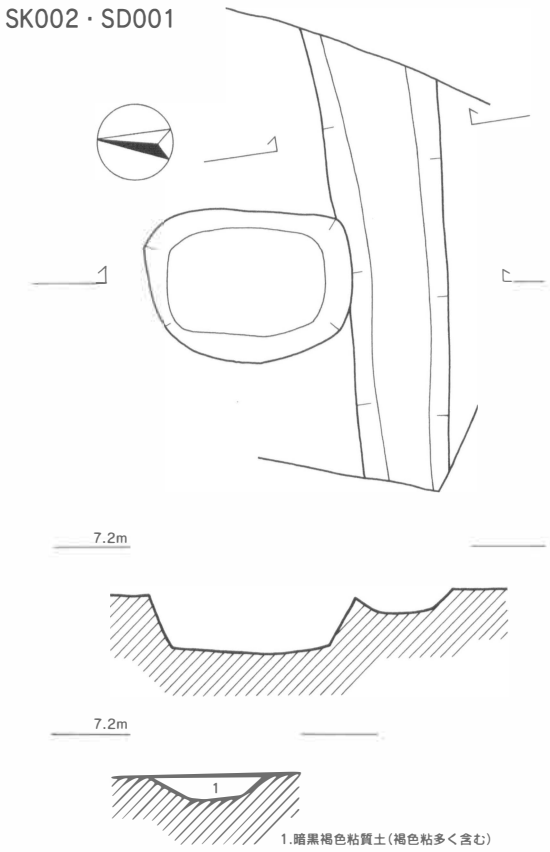


Fig.8　SK002・SD001（1/40）

焼土塊が出土。

SK015（Fig.9）

SK005の西で検出した楕円形の土壙である。検出長軸約1.19m、短軸約1.0m、最大深さ約0.19mを測る。埋土は淡灰黄色土、淡灰黒色土である。遺物は土師器火鉢片が出土。

溝

SD001（Fig.8、PL.2）

調査区南端で検出した溝でSK002を切る。検出幅約0.56m、最大深さ約0.12mを測る。埋土は暗黒褐色粘質土である。遺物は土師器小皿片、こね鉢、陶器擂り鉢、焼土塊、土製鞴羽口片が出土。

SD010（Fig.9、PL.2）

SK005に切られた溝状遺構で西側で切れる。検出幅約1.25m、最大深さ0.21mを測る。埋土は溝底に最大で0.05mの炭化物を含む暗黒灰色土が一面に入る。遺物は土師器坏片、小皿片、青磁碗片、皿片、瓦質土器鉢片、焼土塊、黒曜石剥片が出土。

SD030（Fig.10）

調査区北西隅から東側に延びてSE020の手前で切れる。検出幅約0.75m、最大深さ約0.22mを測る。埋土は淡灰黒色粘質土、暗黒灰色土である。遺物は土師器小皿片、土鍋片が出土。

不明遺構

SX025（Fig.11、PL.3）

調査区北端で検出した不定形な不明遺構で、調査区から東に延びると考えられる。完掘状況から溝ないしは溜池状遺構の可能性がある。完掘状況での主たる掘り込み部分の幅約2.8m、最大深さ約1.08mを測る。遺構北端の掘り込み部は袋状に削られてており、流水による削れの可能性がある。また、南東端にテラスを設け、壙底はフラットで地山は小礫層である。遺物は土師器坏片、小皿片、鉢片、火鉢片、土鍋片、擂り鉢片、茶釜片、白磁碗片、皿片、仏飯具片、耳壷片、青磁碗片、染付片、陶器壷片、擂り鉢片、小皿片、甕片、瓦質土器鉢片、茶釜片、擂り鉢片が出土。

SX004（Fig.11）

調査区中央で検出したピットで、長軸約0.34m、短軸約0.28m、深さ約0.13mを測る。柱穴と考えられるが、他に並ぶピットは検出していない。遺物は土師器小片のみである。

SX006（Fig.11）

SX004のすぐ北東で検出したピットである。長軸約0.38m、短軸約0.29m、深さ約0.20mを測る。柱穴と考えられるが、他に並ぶピットは検出していない。遺物は土師器小片のみである。

SX011（Fig.11）

SK005の西で検出した隅丸方形のピットである。検出長軸約0.56m、短軸約0.46m、深さ約0.2mを測る。穴西隅で柱痕と考えられるピットを検出した。遺物は土師器土鍋片、染付片、陶器片が出土。

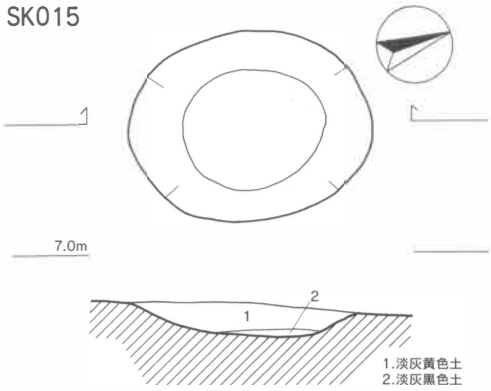


Fig.9　SK015（1/40）

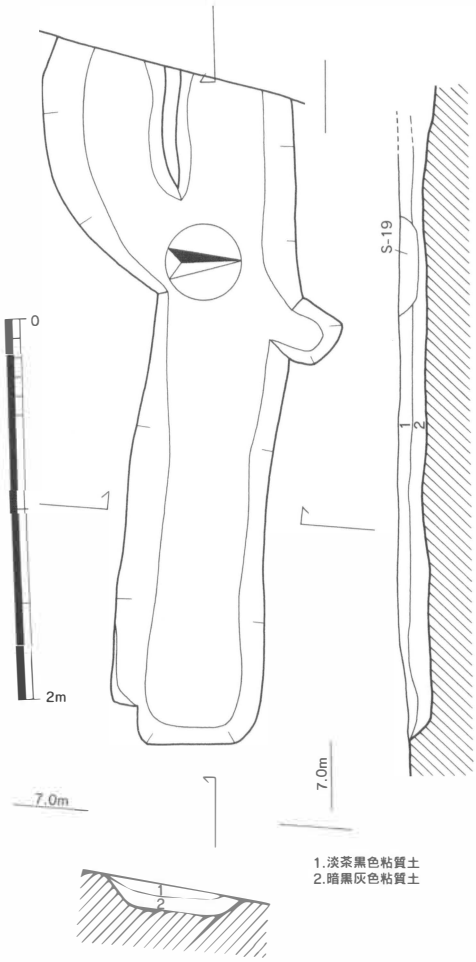


Fig.10　SD030（1/40）

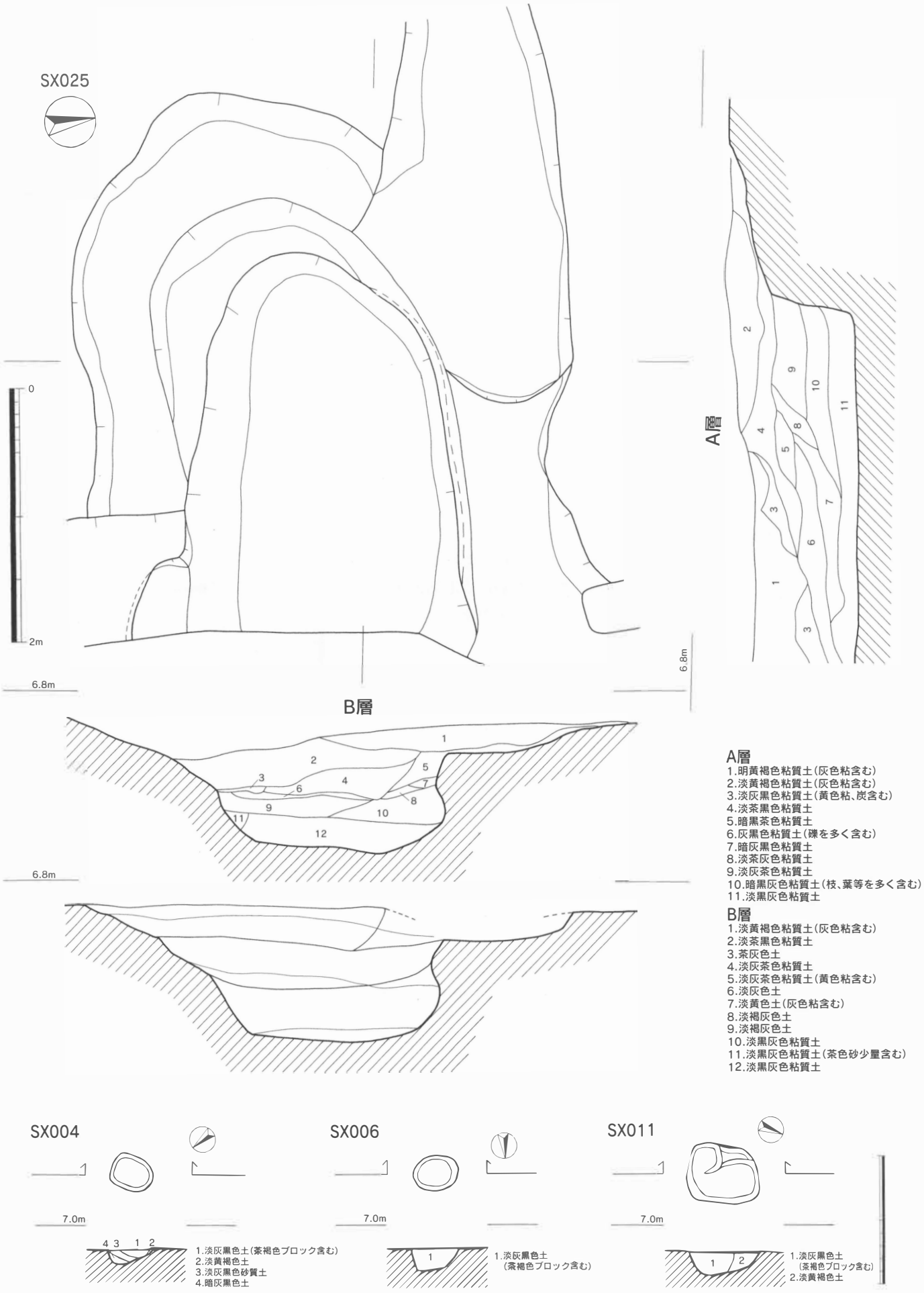


Fig.11　SK025　SX004、006、011遺構実測図（1/40）

(3) 出土遺物

土器

SE020（Fig.12、PL.4）

土師器（1・2）1は坏小片で底径8.0cmを測る。調整は磨耗が激しく不明。内外面共に淡黄橙色、焼成は不良。2は鉢の口縁片で外面に指頭痕と不定方向の刷毛目を施す。焼成不良。

瓦質土器（3）火鉢の口縁から体部にかけての小片である。外面に菊花文、突帯と斜方向の菱形文の叩きを施す。内外面は淡黄灰色、焼成はやや良好。

磁器（4・5）共に青磁椀である。4は高台径6.4cmを測り、高台外面まで淡灰緑色の釉を施す。5は高台径4.6cmを測り、高台接地面以外に緑灰色の釉を施す。高台接地面には残存1/2で3箇所の目跡が残る。

石製品（6）挽き臼で2条の擂り目が残存する。安山岩製。

SK005（Fig.12）

土師器（7）土鍋の口縁部小片で端部を玉縁状に仕上げ、ヨコナデで調整する。外面は指頭痕が残り、内面は横方向の刷毛目を施す。

SD001（Fig.12、PL.4）

土師器（8・9）8は箱形の製品で火鉢の可能性がある。外面と内面一部をヨコナデ、内面下位が不定方向のナデ、底部外面はケズリを施す。9は火鉢で底径25.8cmを測り、外面は突帯を付け、底部付近には工具痕が残る。内面は横方向と斜方向に刷毛目を施す。

土製品（10）鞴羽口の小片で半分が焼け面を有し、鉱物の付着が認められる。

石製品（11）砂岩製の砥石で2面使用している。

SD010（Fig.12、PL.4）

瓦質土器（12・13）12は鍋若しくは鉢片で体部外面に指頭痕と煤が残り、内面は横方向の刷毛目を施す。13は火鉢で外面に突帯、草花文が残り、内面は指頭痕と粘土接合時のひび割れが残る。

磁器（14）青磁皿で内面と体部外面屈曲位まで緑灰色の釉を施す。内面には残存で3箇所の目跡が残るが全部で4箇所あったと考えられる。全体に貫入が入る。

土製品（15）粘土塊である。淡橙褐色を呈する。

SD030（Fig.12、PL.4）

土師器（16～18）16は小皿で口径7.9cm、器高1.85cm、底径5.7cmを測る。底部回転糸切りで内面と外面屈曲位までをヨコナデ、底部付近を不定方向のナデで調整する。内外面共に淡灰白色を呈する。17は完形の坏で口径12.15cm、器高2.6cm、底径8.6cmを測る。底部回転糸切り、調整はヨコナデである。18は土鍋の小片で口縁を玉縁状に形成する。外面は指頭痕と煤が付着、内面は横方向の刷毛目を施す。

SD030暗黒灰色土（Fig.12、PL.4）

土師器（19）灯明皿で口径8.2cm、器高1.8cm、底径6.0cmを測る。底部は回転糸切り、内面中心部をナデ、他をヨコナデで調整する。口縁端部に油煙が残る。

SX025（土層図A 1層～3層）（Fig.13）

土師器（20）坏片で底径7.2cmを測る。底部回転糸切り、内外面共にヨコナデを施す。

瓦質土器（21）鉢片で磨耗が著しいために調整は不明であるが、内面の一部にナデが認められる。

磁器（22・23）22は青磁椀で高台径4.4cmを測る。高台外面まで施釉し、内面は2種の釉を施す。内面見込みに4箇所の目跡が残る。23は染め付け皿で高台径5.6cm、高台外面と見込み部分に下絵を描く。

SX025（土層図A 4層～8層）（Fig.13、PL.4）

磁器（25）白磁椀で高台径4.4cmを測る。体部内外面に灰色に近い透明釉を施し、全体に貫入が入る。

陶器（26）擂り鉢で内面の擂り目は使用により磨耗する。底径13.0cmを測り、体部外面はヨコナデ、底部は糸切り後、ナデで調整する。赤褐色を呈し、焼成は良好。

SX025（土層図A 11層）（Fig.13、PL.4・5）

土師器（27～33）27・28は底部回転糸切りの小皿で27は口径8.5cm、器高1.55cm、底径6.9cmを測る。調整はヨコナデ。28は歪みが激しく口径8.6cm、器高1.8cm、底径6.6cmを測る。調整はヨコナデ。30は底部

回転糸切りの坏で底径6.8cmを測る。磨耗が著しいが一部ヨコナデ調整。30は土鍋で口縁を玉縁状に仕上げる。内面斜方向のナデ、外面は指頭痕が残る。32は茶釜で最大径26.2cmを測る。外面ヨコナデ、内面に刷毛目を施す。鍔下半から煤が付着する。

瓦質土器（33～35）33は茶釜の口縁から頸部片で口径16.2cmを測り、外面ヨコナデ、内面は斜方向の刷毛目を施す。34は鍔付きの土鍋で口径24.2cmを測り、鍔上部の残存部に2箇所穿孔している。内面を刷毛目、外面は磨耗が著しいために不明。35は鍔付きの茶釜で内面を刷毛目、外面をヨコナデ調整する。

磁器（36・37）36は白磁の仏飯具の脚部で底径3.6cmを測る。裾外面端部接地面までを施釉、内面はケズリを施す。37は青磁椀で口径14.5cm、器高5.9cm、高台径5.4cmを測る。高台接地面から内面一部が露胎、他を灰黄色の釉を施す。内面見込みには残存1/2で3箇所の目跡が残る。素地に砂粒を多く含む。

陶器（38）擂り鉢で口径24.4cm、内面に7本単位の擂り目を施す。外面はヨコナデ。備前焼。

SX025（土層図B1層）（Fig.14、PL.5）

土師器（39～43）39は坏で口径11.9cm、器高2.65cm、底径8.9cmを測る。底部回転糸切り、内外面共にヨコナデ調整。40は擂り鉢で底径13.0cm、内面に擂り目を施す。41、42は土鍋で口縁部を玉縁状に仕上げ、42の外面には指頭痕が残る。43は不明製品で大型の火鉢の類が考えられる。内面に刷毛目を施す。

瓦質土器（44）火鉢で外面に2条の突帯を張り付け、刺突と格子のスタンプ、内面は斜方向の刷毛目を施す。

磁器（45）染め付けの瓶で高台径5.3cmを測り、外面に下絵を描き、全面施釉である。内面は無釉で化粧土を施す。

陶器（46）鉢で内面に波条の文様を入れ、外面は一部無釉である。内面は茶褐色釉、外面は暗茶褐色の釉の上から淡茶褐色の釉を施す。

SX025（土層図B2～4層）（Fig.14、PL.5）

土師器（47・48）47は坏で口径11.3cm、器高3.5cm、底径7.8cmを測る。底部回転糸切り、内面はヨコナデ、体部外面は磨耗が著しく不明。48は土鍋で口縁を玉縁状に仕上げる。内面を横方向の刷毛目、外面は斜方向の刷毛目が残る。

瓦質土器（49～51）49、50は火鉢で49は断面台形の突帯を張り付ける。内面は横方向の刷毛目、外面は刷毛目後、ナデで調整する。50・51は茶釜で50は磨耗が著しく調整は不明。51は鍔付きの茶釜で最大径28.8cmを測る。外面は鍔から上位が縦方向の刷毛目、下位がヨコナデ、内面はナデで調整する。

磁器（52～54）52は白磁の皿で高台径4.6cmを測り、内面と外面は高台接地面までを淡青白色の釉で施釉する。見込み部分には目跡が残る。53は青磁の椀で高台径5.4cmを測り、高台外面まで施釉する。高台に沿って打ち欠いた可能性がある。54は白磁の椀で高台径4.4cmを測り、高台接地面以外を施釉する。見込み部分には4箇所の目跡が残る。高台に沿って打ち欠いた可能性がある。

石製品（55）挽き臼で凝灰岩製である。擂り面は使用で磨滅している。

SX025（土層図B9層）（Fig.15、PL.5）

土師器（56）坏で口径11.0cm、器高2.1cm、底径8.5cmを測る。底部回転糸切りで内面はヨコナデ、外面は磨耗が著しく不明。

SX025（土層図B11・12層）（Fig.15、PL.5）

土師器（57～61）57～59は土鍋で何れも口縁を玉縁状に仕上げる。外面は指頭痕が残り、内面は磨耗が著しく不明。60は鍔付きの鍋で口径25.9cmを測る。鍔上部の残存部に2箇所穿孔する。調整はナデで口唇部はヨコナデ。

瓦質土器（61～64）61は鉢で口径25.8cmを測り、内面は指頭痕と不定方向のナデ、外面は指頭痕後のナデ、口縁部はヨコナデで調整する。62・63は茶釜で62は口径16.3cmを測り、口縁内面を斜方向の刷毛目、頸部をナデ、外面は頸部下位に丸形のスタンプと斜方向の刷毛目が施される。63は口径13.9cmを測り、口縁外面を縦方向の刷毛目で調整する。64は擂り鉢で内面に擂り目、外面は指頭痕後の斜方向の刷毛目を施す。

SX025（ 壙底）（Fig.15、PL.5）

土師器（65）土鍋で口縁を玉縁状に仕上げる。内面はナデ、外面には煤が付着する。

瓦質土器（66）鉢で口径26.0cmを測り、体部内面はヨコナデ、底部内面は煤が付着し、体部外面はナデ、底部屈曲位はヘラ削りで調整する。

SX025（Fig.15・16、PL.5・6）

土師器（67～81）67～69は小皿で全て回転糸切りで調整はヨコナデである。67は底径6.5cm、68は口径7.6cm、器高1.3cm、底径4.2cm、69は口径8.3cm、器高1.5cm、底径4.1cmを測る。68、69はつくりが薄くよく精製された胎土である。70～73は坏で全て回転糸切りで調整はヨコナデである。70は底径7.8cm、71は底径8.8cm、72は口径15.1cm、器高2.65cm、底径9.8cm、73は口径12.6cm、器高2.7cm、底径8.2cmを測る。74から78は土鍋の口縁片で全て口縁を玉縁状に仕上げるタイプである。74、76は内面に刷毛目、77の外面には指頭痕が残る。口唇部は全てヨコナデである。79から81は火鉢で79は口径29.6cm、器高7.2cm、80は口径32.6cm、器高8.0cm、24.4cm、81は口径33.3cmを測る。内面は全て刷毛目、外面は縦方向に近い刷毛目を施す。80のみ直口縁である。

瓦質土器（82・83）82は火鉢で口径30.7cmを測る。内面に横方向の刷毛目を施し、外面はナデである。83は鍋で外面には煤が付着する。内面はヨコナデ。

磁器（84～87）84は白磁の壷（四耳壷）で高台径8.1cmを測る。内面は釉が淡茶褐色と淡白青色で外面は淡白青色で高台部分に釉だれしている。高台はケズリ出しである。85は青磁椀で高台径4.6cmを測る。内面見込みに輪状の釉カキ取り、外面は残存部に釉は施されていない。釉調は淡灰緑色である。86は青磁椀で口径12.3cmを測り、内面見込みには釉のカキ取り、外面は体部の一部が露胎。87は染め付け椀で口径9.7cmを測る。外面に丸文を描き、体部に貫入が入る。

陶器（88・89）88は甕の底部で底部糸切り、内面には自然釉が付着し、外面には釉だれしている。外面紫灰色、内面は灰褐色を呈する。備前系の鉢。89は壷で須恵器に近い淡灰黄色を呈し、口径8.8cmを測る。つくりが薄く調整はヨコナデ。

包含層（Fig.16、PL.6）

磁器（90・91）90は龍泉窯系青磁椀で内面にヘラ、櫛状の文様を施し、外面は無文である。高台径6.2cmを測る。91は白磁椀で高台径7.0cmを測る。高台に沿って打ち欠いている。釉は内面と高台外面まで施す。

陶器（92）壷で底径9.0cmで回転糸切りである。内面はヨコナデで自然釉が付着する。外面はヨコナデ後黒褐色と暗褐黒色の釉を部分的に施す。底部と体部の境には指頭痕が残る。

木製品

SX025（土層図A 1層・2層）（Fig.17、PL.6）

下駄（93）連歯の下駄で歯は差し込み式である。長さ22.1cm、8.4cmを測る。

曲げ物（94）底板は無く、曲げ物継ぎ材として木皮が4条顕著に残る。材下位には直径約4cm程の穿孔が残る。

不明製品（95）長さ8.6cm、幅約2.2cmを測る不明製品で下部に直径約1cm程の穴を穿ち、上部は抉りを施す。

SX025（土層図A 11層・B12層）（Fig.17、PL.7）

皿（96）見込み部分に抉りを施し、体部に丸みをもたせた製品である。口径16.0cmを測る。

桶（97）板状の材に丸みを施し、円上に抉りをもたせ、底板にしたものではないか。

不明製品（98～102）98は竹を枝状に分割し先を削ったもので、同様の破片を2点同時に出土している。元々は筒状であったと考えられる。99は板状のものに溝を彫ったものである。100は板材の上部に2箇所、直径5cmから7cm程度の穴を穿ち、下部には左右に2箇所ずつ直径3mmから4mm程度の穴を穿つ。101は棒状の材の上部に抉りを施し、断面四角形に調整する。102は材を断面四角形に加工し、棒状に仕上げ、先端を削る。箸の類か。

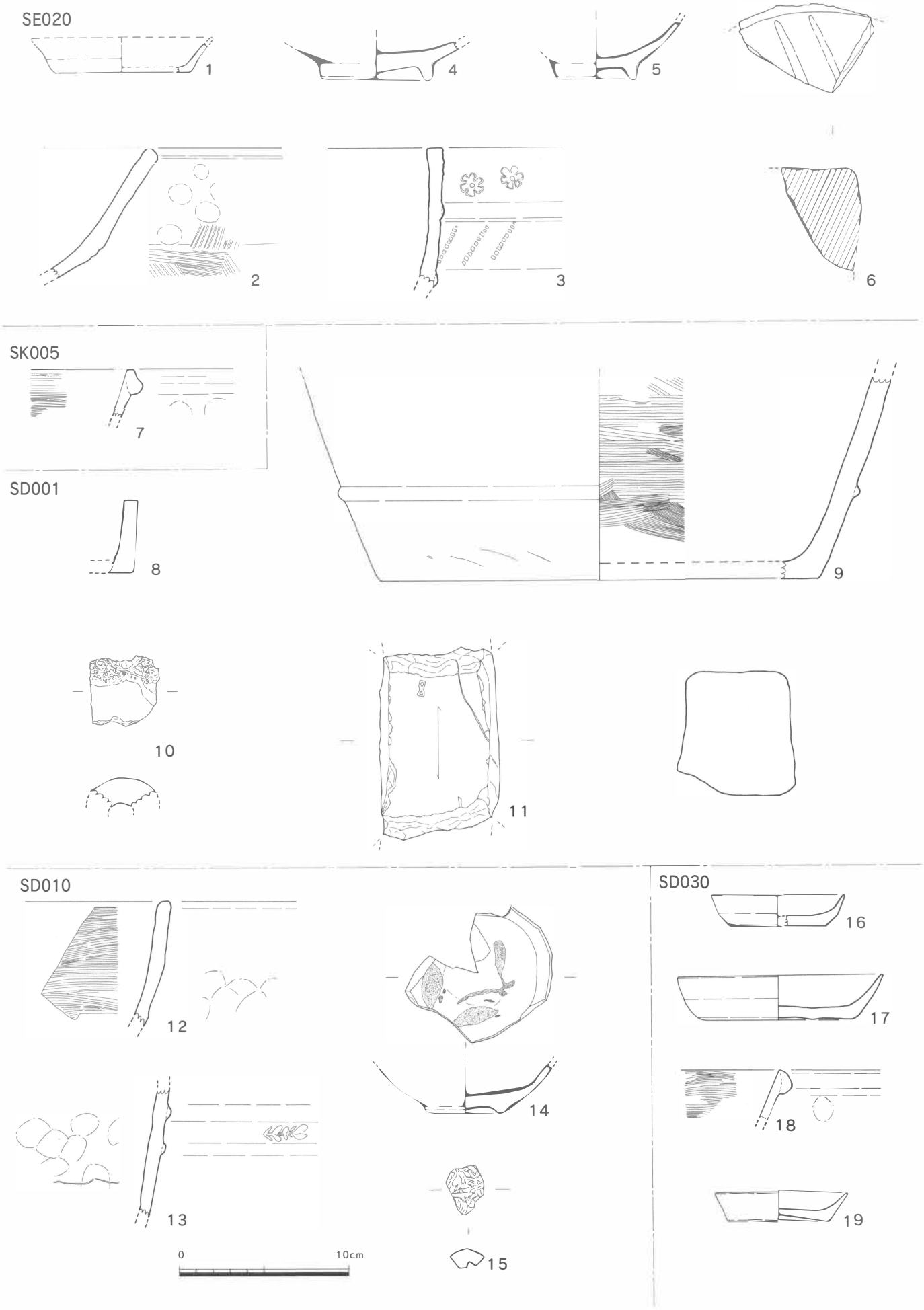


Fig.12　SE020、SK005、SD001、SD010、SD030出土遺物（1/3）

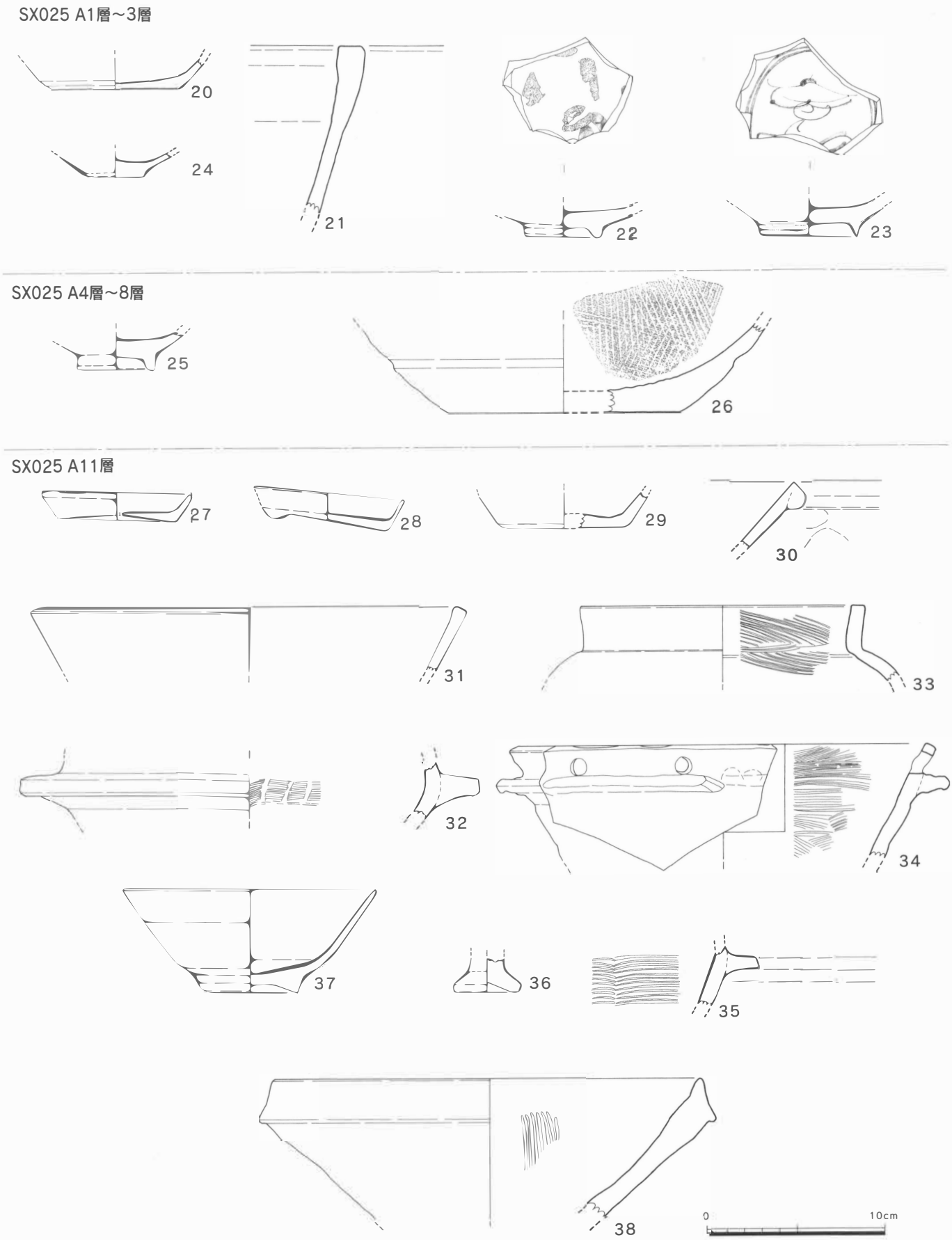


Fig.13　SX025出土遺物（1/3）

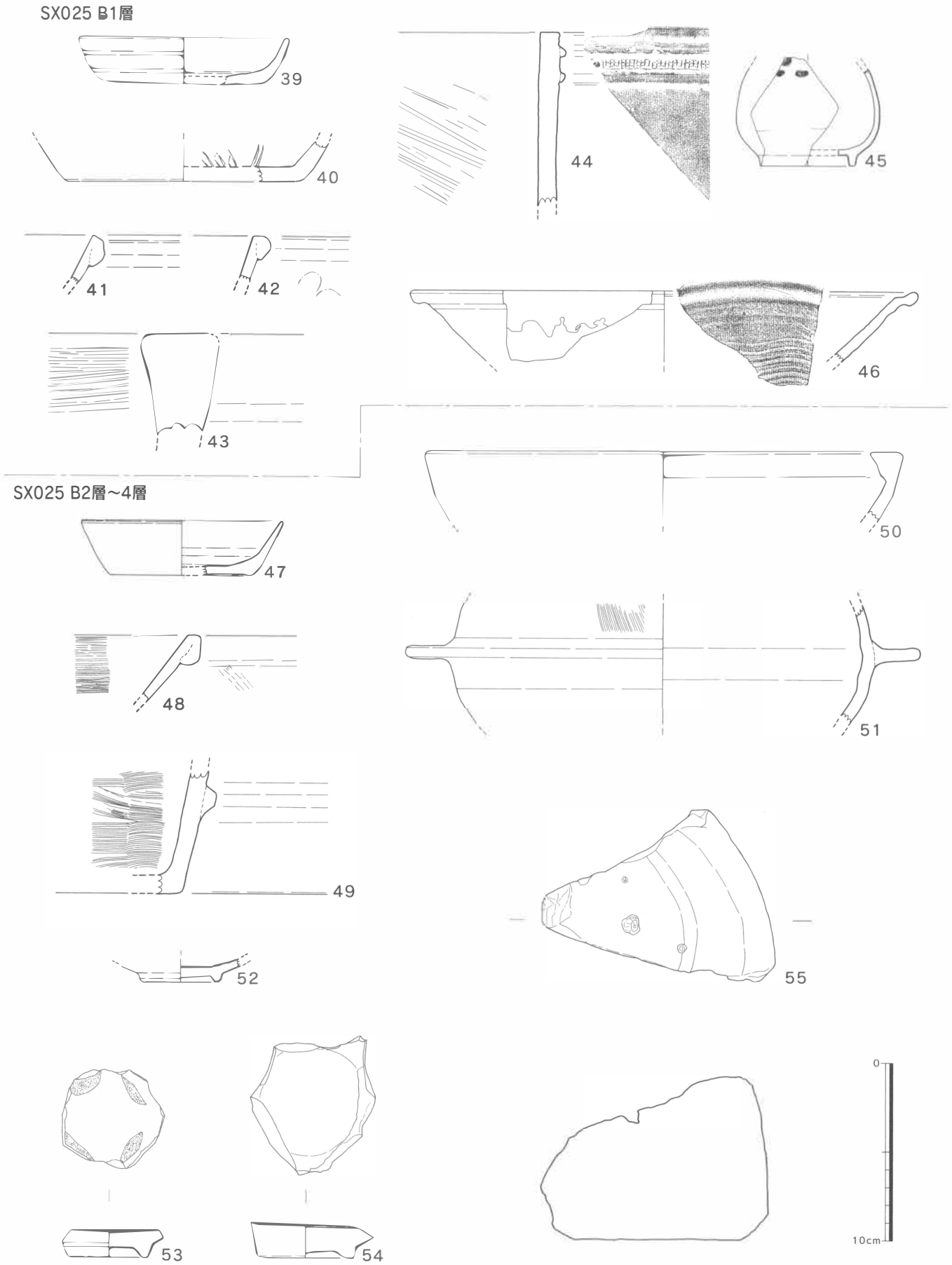


Fig.14　SX025出土遺物（1/3）

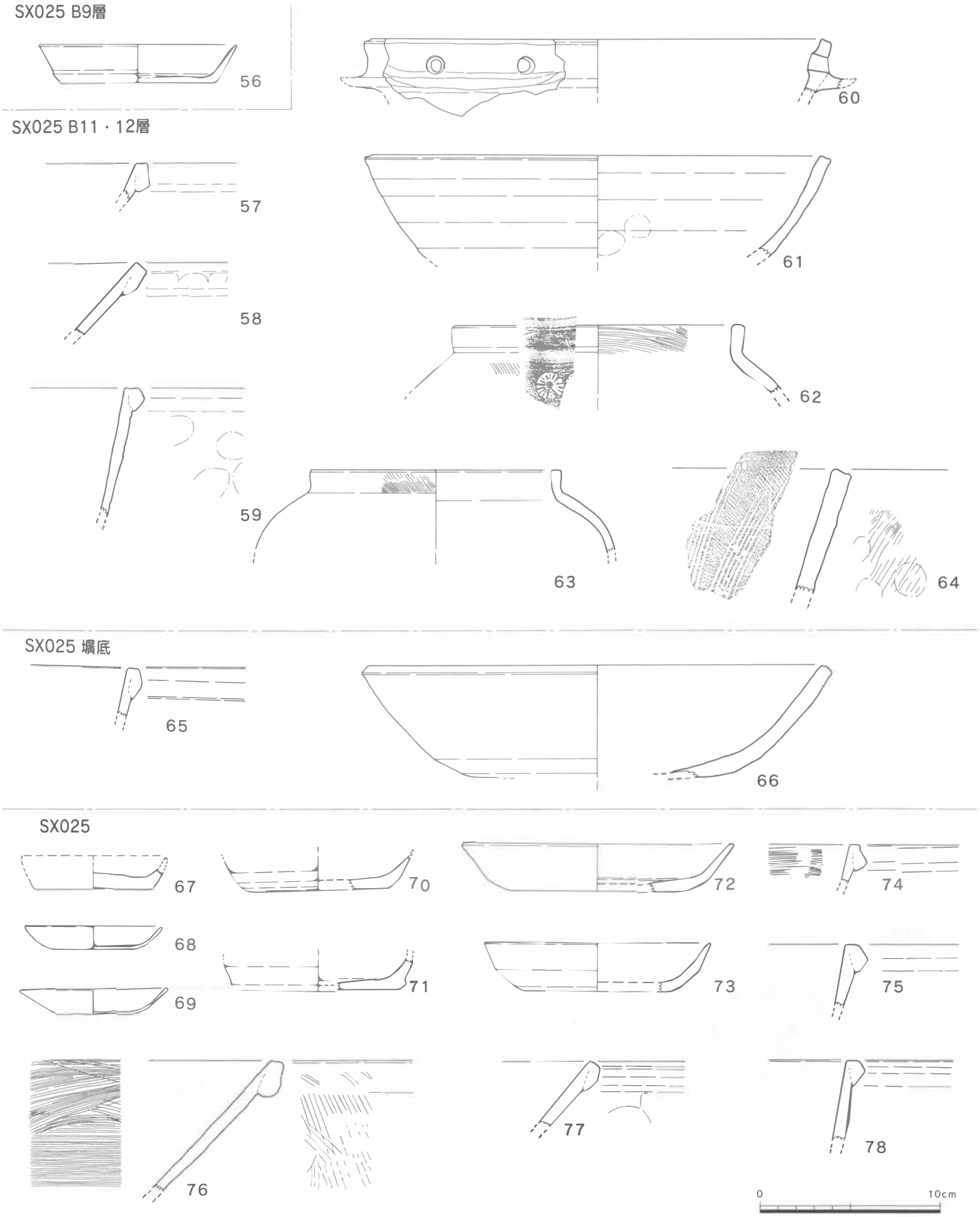


Fig.15　SX025出土遺物（1/3）

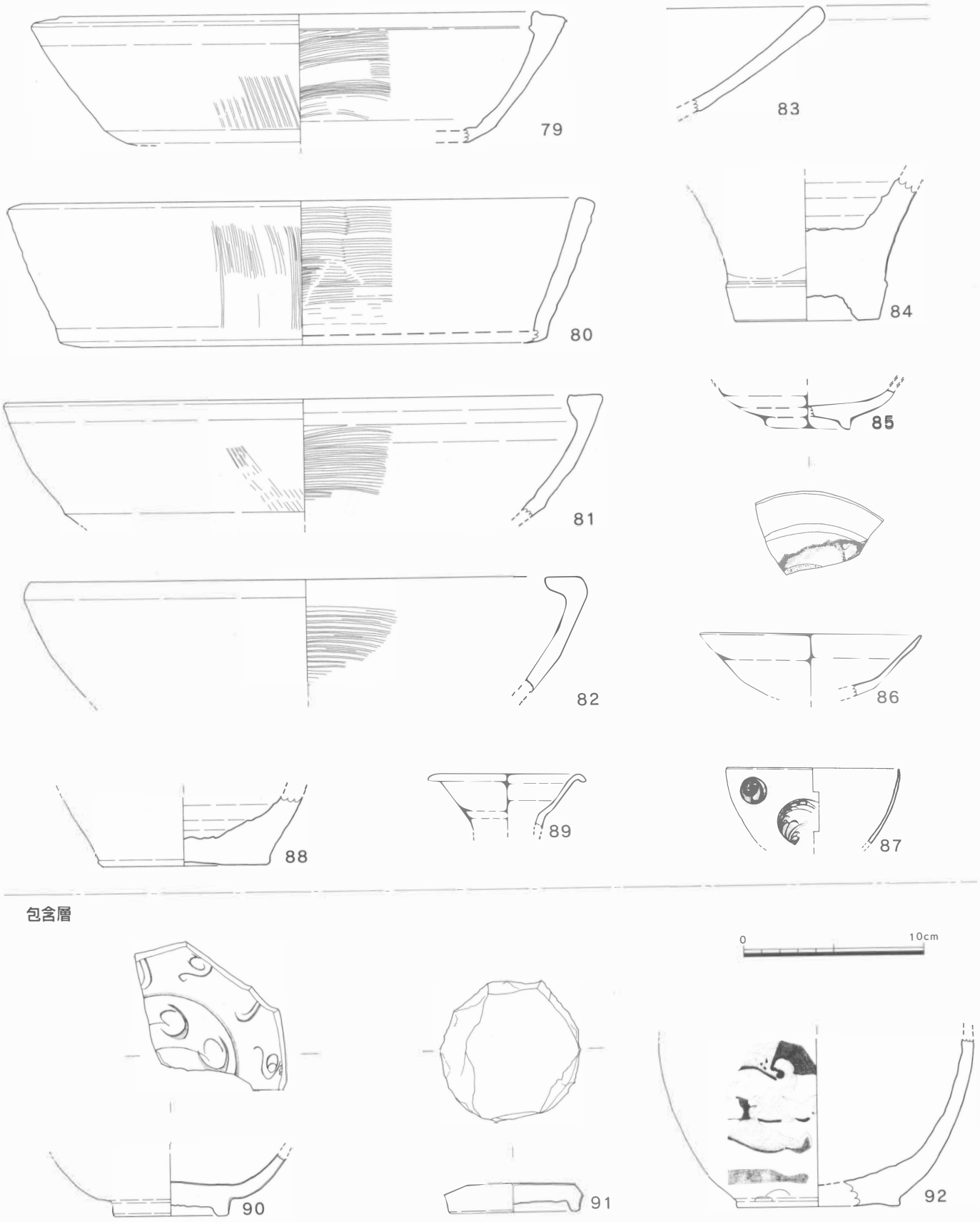


Fig.16　SX025、包含層出土遺物（1/3）

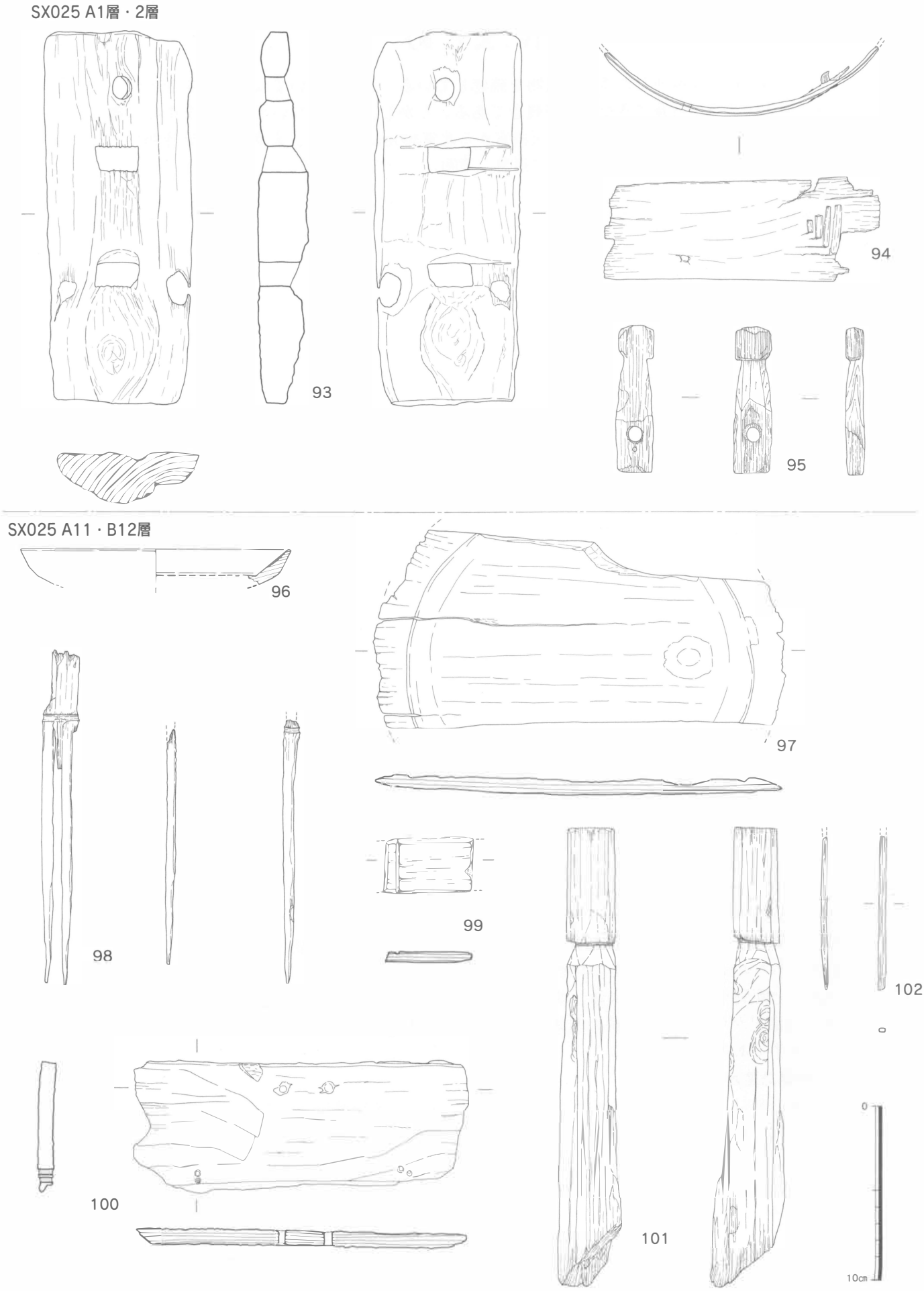


Fig.17　SX025出土遺物（1/3）

Ⅳ.まとめ

上北島篠島遺跡では前述した遺構・遺物を確認している。遺構については僅少な調査区のため、遺構の性格や全体像までが言及できないのが残念である。しかし、遺物については中世を中心に纏まった資料が出土している。また、調査地は水田天満宮から北東400mに位置し、太宰府の安楽寺領である水田荘との関わりも歴史的に重要である。以下に遺構、遺物についてまとめる。

1）遺構

主な遺構としては井戸、土壙、溝、ピット、不明遺構が挙げられる。中心となるのは溝状に検出したSX025であり、これに対して南側に井戸、土壙、ピットが展開する。調査区は南半分が礫層になっており、遺構を殆ど確認していないが、近隣の方の話によると以前は南側の方が小高くなっていたという話を聞き、若干北斜面に遺構は存在していたと考えられる。また、不明遺構や井戸等が同時期に存在していたかは不明で、人為的に埋めたと考えられる遺構（SX025、SE020）と自然に堆積して埋没したと考えられる遺構（SK005、015、SD030など）が存在し、層序や切り合いにより同時期の遺構であるという判断はできない。しかし、殆どの遺構の軸が北から若干東へ振れており、明治時代の地形図や現在の地形とも合致していることは遺構が生活面として存在していた時期からの名残りであり、遺構の同時期性を考える上での重要なポイントになる。

SX025　先述したように僅少な調査区のため遺構の性格を判断でき得なかった。しかし、考えられるものとして「区画溝」と「溜井状の水場」が挙げられる。区画溝は市内遺跡でも中世の居館跡と考えられる遺跡から数例報告されており、調査地周辺では下北島櫛引遺跡や長崎坊田遺跡、島田外屋敷遺跡が挙げられる。これらの溝は幅1.7m～5.4m、断面形態はU字に近い逆台形であり、今回検出したSX025は幅2.8mで側面が袋状に削られている点が他の溝と違う。これはある程度の流水があったと想定され、遺構周辺が段状に低くなっているのは周辺の水（雨水など）が集中して流れ込んだものと考えられる。居館の区画というより土地の区画と考えた方が適切である。一方、溜井状の水場であった場合、壙底が礫層であるため調査当時雨が降っても水が溜まらなかった事があるが、逆に遺構が使用されていた当時、湧水があった可能性も考えられ、遺構南隣に井戸が掘られていたことが湧水の事実を物語っている。しかし、共に「推定」の域から脱しない「可能性」として指摘するものであり、調査区延長上に眠る遺跡の調査で、この遺構の全容解明を期待するところである。

2）遺物

遺物は中世を中心に近世までの土器や石器、木製品が出土している。遺構出土遺物全体を概観しても出土器種や種類に違いは見られないが、時期幅として13世紀後半から18世紀前半までの遺物であり、主体を成すのは16世紀前後である。以下に各遺構の遺物の年代観を概観するが、何れも筑後での編年ではなく、土師質、瓦質は福岡・佐賀平野、搬入品は太宰府・備前、染め付け等は肥前の編年から引用したものに過ぎず、遺物の使用及び廃棄の年代や遺構埋没の年代と合致することには否定せざるを得ない。

SE020　土鍋や火鉢など16世紀前後を主体とする遺物である。

SK005　玉縁状の口縁をもつ鍋は14世紀以降に出土傾向が見られる遺物である。

SD010　鍋や火鉢は16世紀前後の遺物である。

SX025　土師質や瓦質の鍋、火鉢、茶釜などは14世紀から16世紀前後の遺物と考えられ、搬入品は備前の鉢が15世紀から16世紀、白磁の四耳壷が13世紀後半から14世紀前半、染め付け碗が17世紀後半、瓶が18世紀前半であると考えられる。

3）上北島篠島遺跡

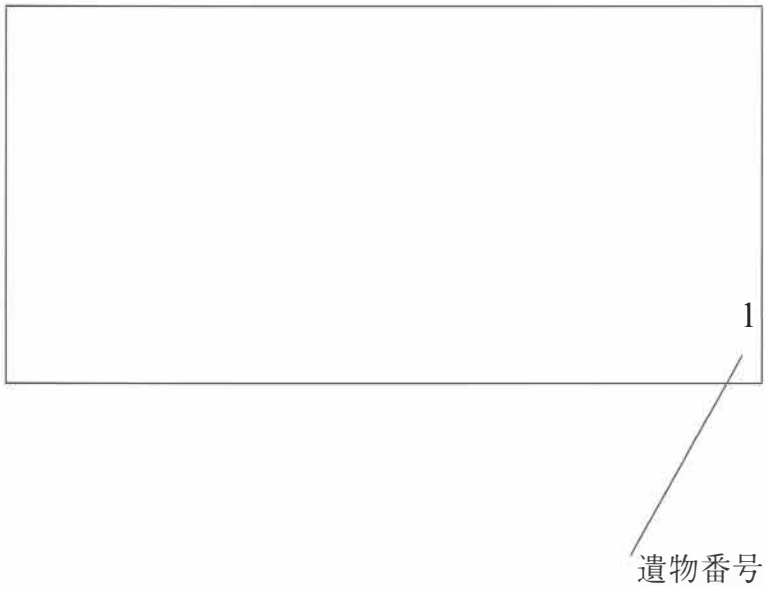
今回の調査地は、水田天満宮を中心に鎌倉時代から栄えた筑後地域の一大拠点に位置する。室町時代には水田窯業が起こり、中世荘園「水田荘」が繁栄した時代に遺跡は存在した。遺跡からは確認された遺構や遺物によって当時の生活の復原を行う資料が蓄積され、筑後市に於ける中世集落の解明の一助になるものである。今後の調査で「可能性」から「確実」になる資料の増加に期待する。

参考文献　『榎崎遺跡』筑後市文化財調査報告書　第9集　1993　『長崎坊田遺跡』筑後市文化財調査報告書　第23集　1999
『筑後西部地区遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書　第29集　2000　『第3回中近世備前焼研究会資料』　中近世備前焼研究会　2000
『筑後市内遺跡群Ⅱ』筑後市文化財調査報告書　第29集　2000　『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会　2000
山村信榮『太宰府出土の瓦質土器』中近世土器の基礎研究Ⅵ　1990　徳永貞紹『肥前における中世後期の在地土器』　中近世土器の基礎研究Ⅵ　1990

PLATE

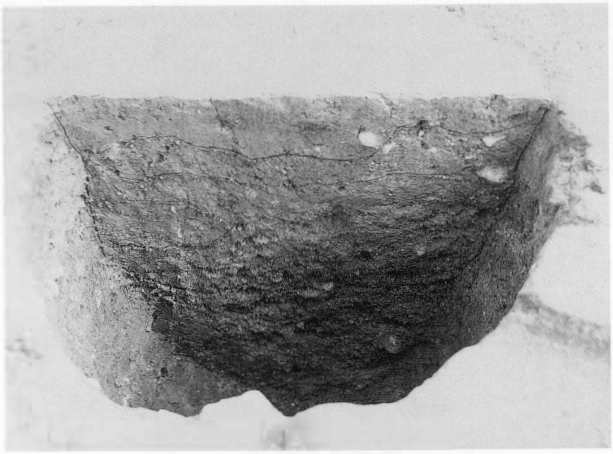
凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

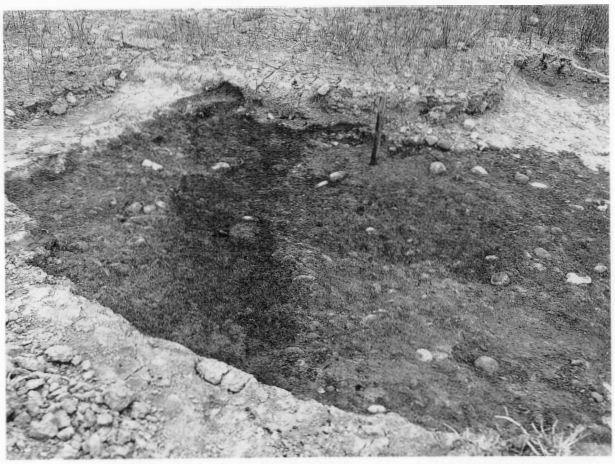


上北島篠島遺跡調査前風景（北から）

上北島篠島遺跡完掘状況（北から）

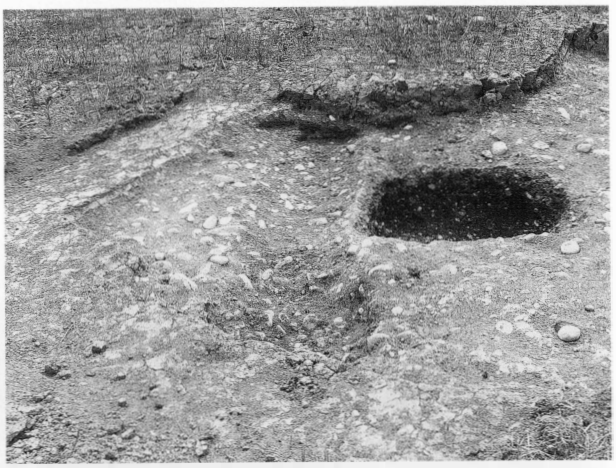


SE020土層観察（北から）

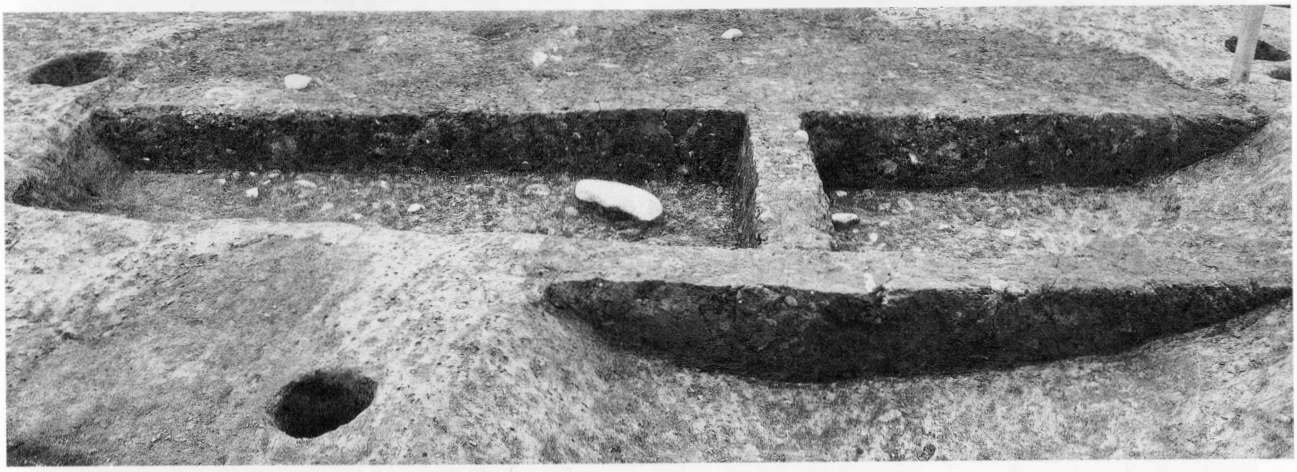


SK002、SD001検出状況（東から）

SE020完掘状況（北から）



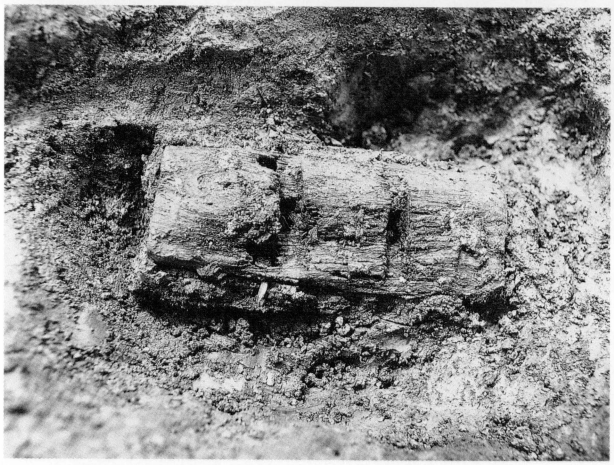
SK002、SD001完掘状況（東から）



SK005、SD010土層観察（東から）

SK005、SD010完掘状況（東から）

SX025完掘状況（北から）



SX025下駄出土状況（西から）

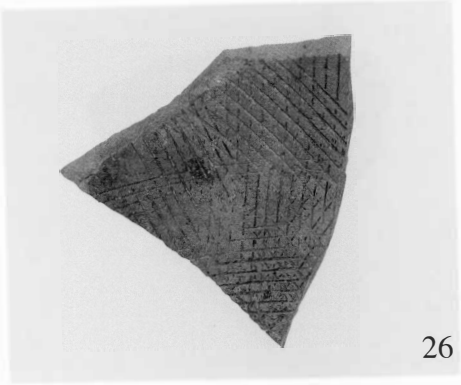
SX025曲げ物出土状況（西から）

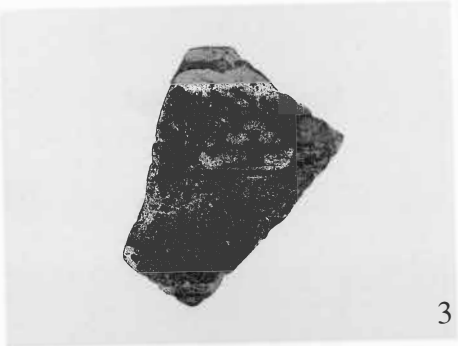
SX025桶出土状況（南から）

SX025不明製品出土状況（南から）

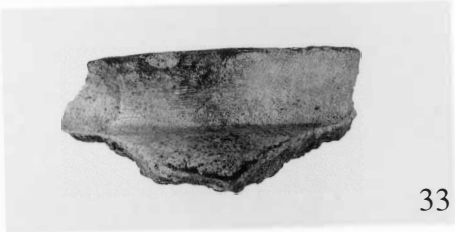
2

9

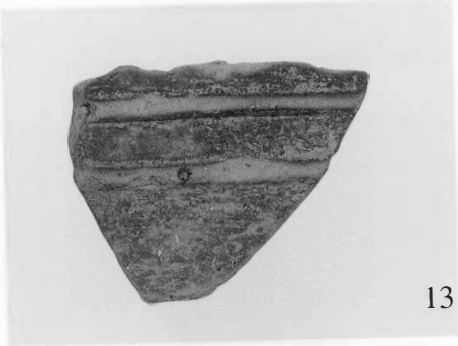

26

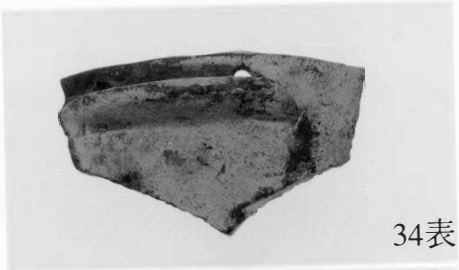

3

10


33

5


13

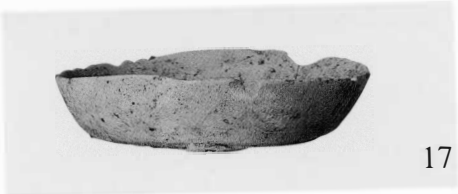

34表

34裏

6

14

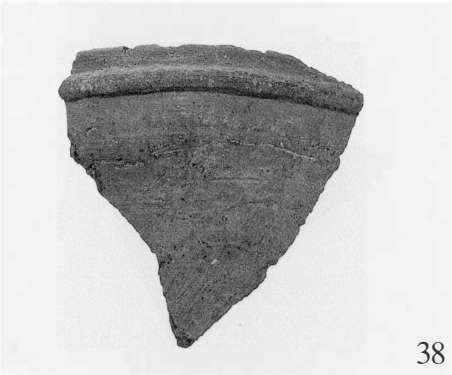
36


17

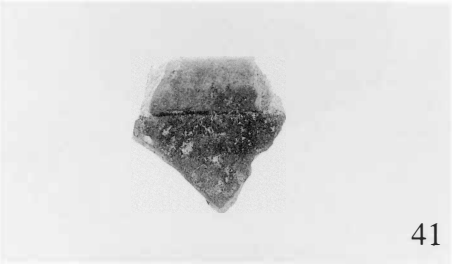
37

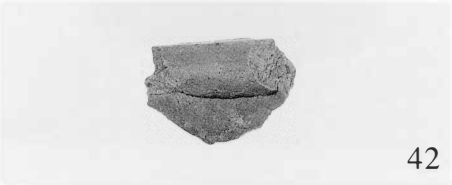
8

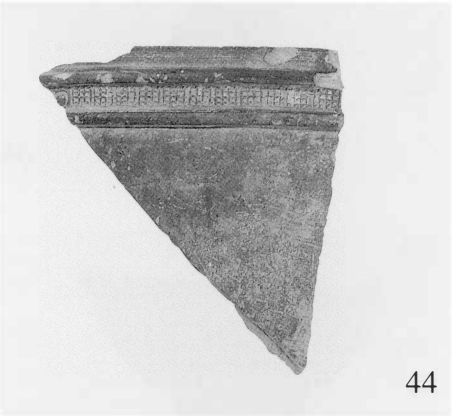
19

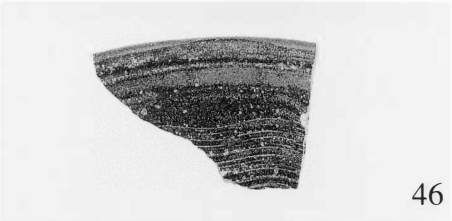

38

40


41

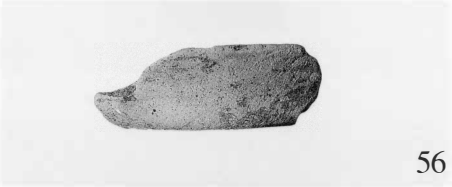

42

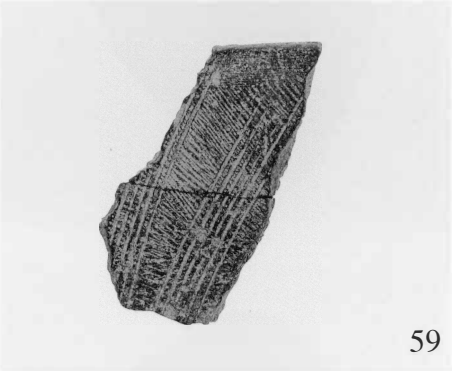

44

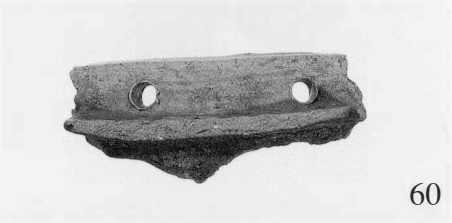

46

47

49


56


59


60

66

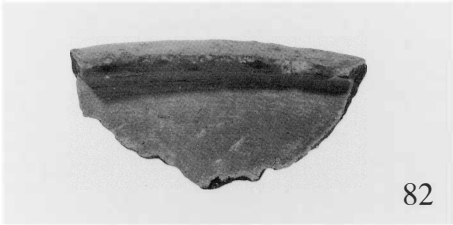
68

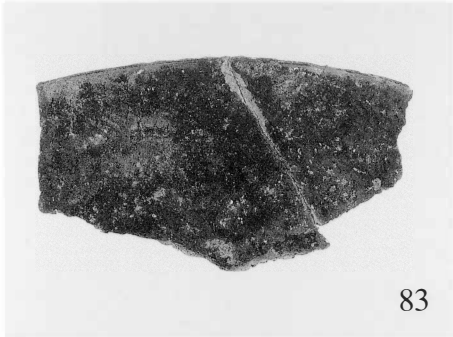
69

76

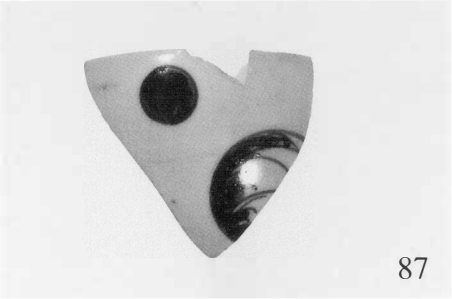
79

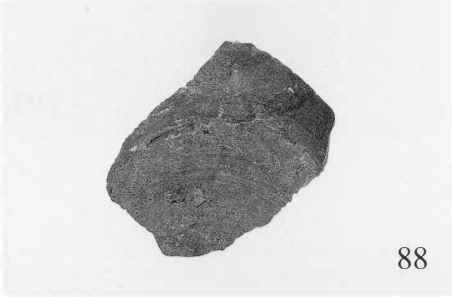
80

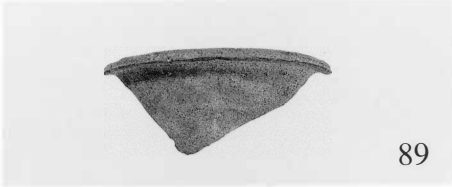

82

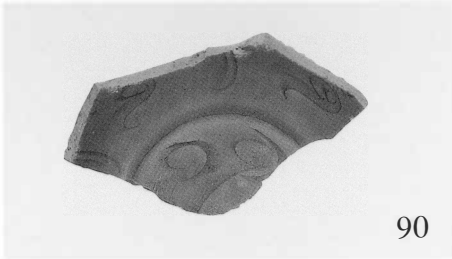

83

84

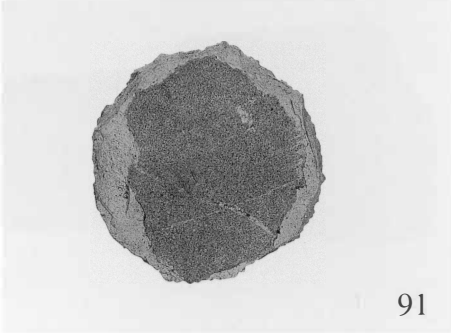

87

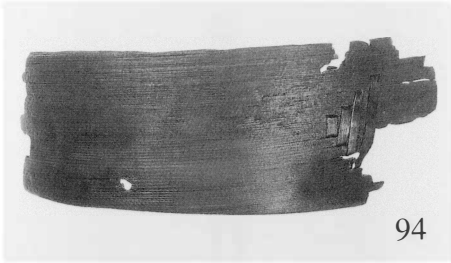

88

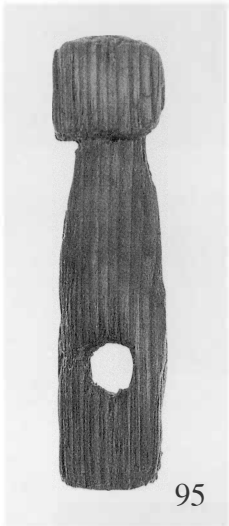

89

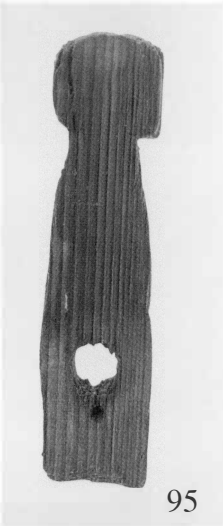

90

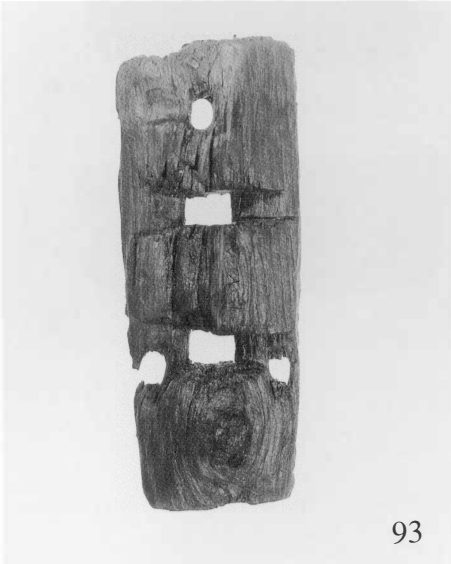
93

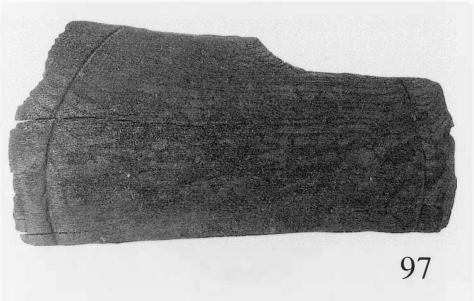

91


94


95

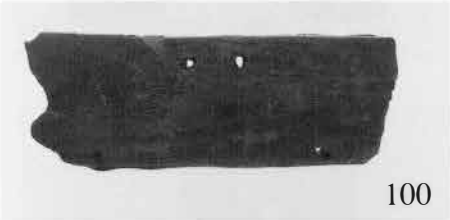

95

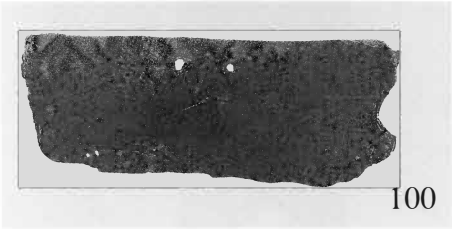

93

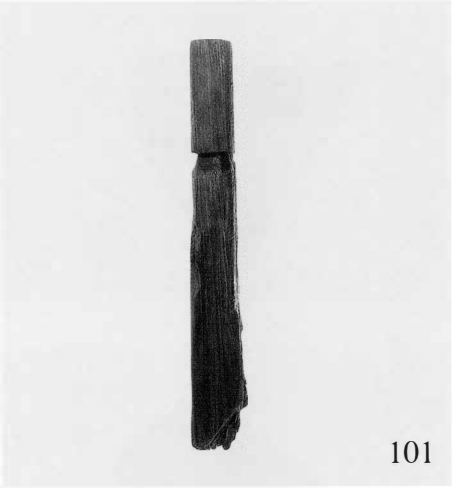

97

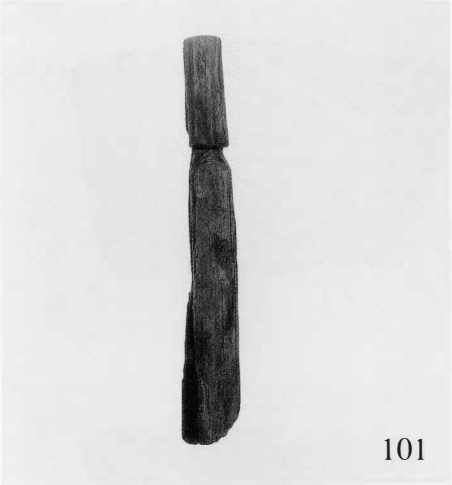
98

99


100


100


101


101

上北島篠島遺跡
筑後市文化財調査報告書
第39集

平成14年3月31日
発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
印刷　（資）四ヶ所印刷
福岡県甘木市大字馬田336